

関根達人編

## 『松前の墓石から見た近世日本』

浪川 健治

本書は、編者関根達人氏を研究代表者として二〇〇七～二〇〇九年度にかけて行われた日本学術振興会科学研究費補助金による調査「近世墓と人口史料による社会構造と人口変動に関する基礎的研究」の成果を一般に公表したものである。同調査は他に分担研究者四人に加え、研究協力者六人で行われ、北海道松前町の現地調査やデータ整理等に学部学生の参加があったことが記される。

関根達人氏は、この間、二〇〇二年に「近世大名墓における本葬と分霊―弘前藩主津軽家墓所を中心に―」（『歴史』99、東北史学会）、二〇〇四年に弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅲ『津軽の飢饉供養塔』、二〇〇五年に「飢饉供養塔からみた北奥近世社会の一側面」（『歴史』105、東北史学会）、弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅴ『下北・南部の飢饉供養塔―補遺 津軽の飢饉供養塔―』と、この研究の基盤ともなるべき弘前藩領における諸業績を発表している。また本書に結実した科研に関わる調査と平行して、いずれも澁谷悠子氏とともに二〇〇七年に「津軽の近世墓標・過去帳にみる社会階層」（『北方社会史の視座』1 所収、清文堂）、「墓標からみた江戸時代の人口変動」（『日本考古学』24、日本考古学協会）、弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅶ『津軽の近世墓標』を刊行するなど、精力的に研

究を進めている。

本書は、歴史事実を認識し歴史知識を構成する歴史資料を広くそのよりどころとなる素材に求めることで、すなわち墓石という物体的遺物によって、松前という特徴的な近世城下町の歴史性を解明した意欲的なものである。墓石や過去帳に記された文字情報を手かりとして、被葬者の没年や性別、社会的・経済的状况を把握し、それが墓石の大きさ・形状・材質、埋葬施設、副葬品といった非文字情報とどのように対応するものであるかを解明し、それらの考察を通じて近世社会の特質に迫っている。本書の構成は次の通りである。

1. 墓石研究の目的と調査地の選定 榎森進
2. 松前と松前の寺院 関根達人
3. 調査の方法 関根達人
4. 社会と墓  
（1）松前の墓石と社会 谷川章雄  
（2）墓石にみる松前藩の権力構造 関根達人
5. 寺と墓 朽木量
6. 家と墓  
（1）家墓の形成過程 渋谷悠子  
（2）家の永続性と無縁化 富塚博子・関根達人  
（3）子供の墓の成立と展開 関口慶久
7. 個人と墓 関根達人
8. 墓石にみる江戸時代の人口動態 関根達人

9. 城下町の墓と周辺村落の墓

関口慶久

10. 松前と他地域との交流

(1) 人の交流

渋谷悠子

(2) 墓石の流通

鈴間智子

(3) 墓石の流行からみた情報伝達

林久美子

むすび

関根達人

関根達人氏の「1. 墓石研究の目的と調査地の選定」においては、研究の目的を、第一に近世墓を材料としてそれを生み出した近世社会の構造の理解にあるとしている。このことについて「近世社会の構造的特徴は、身分制とともに極端に閉じた政治的・経済的・社会的環境にあると考えるが、近世墓は、そのような問題に対し、家という社会の最小の単位から出発し、全国レベルでの地方差まで検討することが可能である」という理解が示される。第二には、「近世社会の人口動態を明らかにすること」をあげる。そして、「墓石から推測可能な数値としては、男女比と死者数」があり、「普遍性をもつ墓石を用いれば、飢饉毎に各地の人的被害状況を推定することも不可能ではない」としている。その上で、北海道松前町を調査地に選び、江戸時代の墓石と歴史人口関連史料の調査・分析を、研究の中心に据えることとしたことが述べられている。以下、本書に収録された各氏の論考は多岐に亘って興味深い内容であるが、紙幅に限りがあり、残念ながら一々の論考について触れることができないことをお断りしておきたい。

さて、本書の成果を得た今、その成果の上に次の二点が今後、さらに研究を深化させていくことが可能であるように思われる。本書は、松前

という城下町に対象を据えた丹念なフィールド・ワークの成果であることとは言うまでもない。そのことにより、面として、あるいは数量としての貴重なデータが我々に提示されている。ただ、松前はたんに松前藩の城下町であるという側面のみならず、アイヌ民族との関わり、また場所請負商人などの他の城下町にはみられない町人層なども存在した。この点で、ともすれば、本研究はむしろ藩主や藩士といった支配層に主眼を置いた分析となっている。

この点について、そうした、近江町人商人に出自する城下町人、彼らを保証人とした場所請負人など、商人たちの性格による相違など多様なあり方を踏まえた分析がなお可能であろう。とくに、弘前藩の松前用達を務めた工藤忠兵衛など、近江商人が支配的な松前藩経済のなかにあつて、近江商人の系譜をもたず、栖原家・飛騨屋と産物の取り引きを軸に、資金融通などを含めて、きわめて緊密なスクラムを組んでいたとされる特徴ある町人に着目すれば(田島佳也「北に向かった紀州商人」『日本海と北国文化』、小学館、一九九〇)、「6. 家と墓」「8. 墓石にみる江戸時代の人口動態」「9. 城下町の墓と周辺村落の墓」などにおいて文献史料研究と総合した形での近世松前の歴史的な特色づけがより深化する可能性を秘めているよう。

本書においても「10. 松前と他地域との交流」が取り上げられ三本の興味深い論考が収められている。これらは主に被葬者や墓石の素材・形態等を分析したものである。松前藩については、必ずしも藩政史料等が豊富ではなく、これらは貴重なデータとして学術的価値をもっている。

とはいえ、海峡を挟んだ弘前藩領では、寛政七年(一七九五)頃、弘前

茂森町に「葬式道具家業式軒」が開店し、墓堀・火葬までの葬式一切を執り行うようになった(「封内事実秘苑」)。葬儀そのものが、商業化されはじめたのである。こうした変化が、どのような影響を持ったのか、より密接に上方との交通上のつながりをもった松前では一層検証されてくるのではないだろうか。

天保二年(一八三一)に、幕府は「葬式石牌院号居士等之義二付御触書」を出し、百姓・町人が「身分不相応大造之葬式いたし、又は墓所へ壮大之石碑を建、院号・居士号等附著」することを咎め、「墓碑之儀も高サ台石共四尺を限り、戒名は院号・居士号等決而附申間敷」と命じ、さらに「修復等之節、院号・居士号相除、石碑取縮」ることを命じている(『徳川禁令考』前集第五、二七四四)。これは、弘前藩にも伝達される(『御用格』第二次追録本、町、「被仰出」天保二年六月朔日)、盛岡藩にも伝えられた(「封内事実秘苑」。とすれば、どれほどの実効性があったかは不明であるが、松前藩も当然、これを承知していたと考えられる。「4. 社会と墓」ともあわせ見たときに、葬礼をめぐる幕藩権力とさきに指摘したような葬儀の商業化さえ進行する地域社会との葛藤について、墓石の分析を通じた提起がなされてくることを期待したい。

本書は、歴史資料としての積極的な墓石や過去帳の分析と総合による成果であり、新たな地域史研究のあり方を示すものである。前述の諸点は、新たな歴史学の可能性への期待でもあり、方法論も含め、地域史研究の新たな地平を切り開くものとして広く読まれるべき一冊であろう。

(A5判、二三六頁、北海道出版企画センター、二〇一二年一二月刊、

八〇〇〇円十税)